

学校で身に付けるべき「学力」とは？

2008年に学習指導要領が改訂されました。「十年一昔」といわれるように、10年も経てば時代は変化します。すべての事柄に変化への対応が必要とされます。指導要領ももちろんそうです。ただ他の事柄と違う点は、指導要領は日本の教育の元になるものですから、その場ですぐに変えてよいものではありません。10年近い年月をかけて、様々な議論を経た上で改訂されます。前回の改訂では「体験的学習」という言葉が一人歩きして、いろいろなメディアで毎日のように議論されました。しかしながら意見はまとまらず、様々な考え方により学校は混乱しました。その結果、学校では基本を踏み外した実践が横行しました。「国際理解」と称して延々とカレーライスを作ったり、「日本文化を知る」と称してそば作りに励んでみたり。そして問題になったのが「基礎学力」を保証していないのではないかということでした。いわゆる「学力低下論争」です。

ところで、この「学力」という言葉は何を意味するのでしょうか。この言葉も様々な解釈がなされています。同じく2007年に改訂された「学校教育法」の第30条の第2項には

- ① 基礎的な知識及び技能の習得
- ② これら(①の事柄)を活用して課題を解決するための思考力、判断力、表現力その他の能力
- ③ 主体的に学習に取り組む態度

の3つの記述があります。この3つが「法律が定義する学力」であると考えられます。今回の学習指導要領も、この考えに沿って作られています。

学校は「学力」を身に付ける場所であるはずですが、我々教師はこれら3つを頭に置きながら授業をするべきなのです。聖学院では、上記の①は「徹底的な反復による習熟」、②は「まず基本事項を教え、それを土台として様々な問題を考えてもらう」、③は「『アクティブラーニング』など意欲を高める工夫」と考えています。そしてこれらを元にして、聖学院では毎日の授業を組み立てています。

聖学院中高の数学

聖学院の6年間を、我々は『入門期』『発展期』『完成期』の3段階に分けています。

まず中1・2の『入門期』では、算数ではなく、数学を学習していく上で不可欠な「基礎」と、家できちんと勉強するという自宅学習の「基礎」をしっかりと身に付けてもらうことを主眼にしています。「正負の数」から始まる中学校の数学は、これから勉強していく数学のエッセンスです。ですから、ここできちんとした「基礎」を身に付けておかなければ、より高度な数学は修得できません。問題集やプリントなどを用いて演習の時間を多く設け、積み木を組んでいくように授業を進めます。そして自宅学習の大切さも実感してもらいます。演習によってせっかく身に付いた基礎・基本も、放っておいたらすぐに忘れてしまいます。したがって、それらを「本物」にするためには、毎日1時間程度の自宅学習が不可欠です。授業では新しいことを勉強しますから、教師は懇切丁寧に説明をします。生徒諸君もその場では分かっています。しかしそれらは決して「本物」にはなっていません。数学は積み重ねが大切です。授業だけで分かったつもりになっていると、そのうちに分からなくなってしまい、「数学は難しい」となってしまいます。この流れを断ち切るためにも、自宅での学習が必要不可欠なのです。しかしよく聞くのは「何を勉強すればよいのか分からない」ということです。徒に1時間を過ごしても無意味です。「こんなことをしなさい」という自宅学習の「基礎」もこの時期に学習してもらいます。

次の中3・高1の『発展期』では、『入門期』で学習した「基礎」を受けて、数学の「基本」を学習していきます。「基本」というのは、『入門期』で身に付けた数学の「基礎」がいくつか集まってできているものです。ですから当然複雑に、そして難しくなってきます。徐々にではありますが、問題を解決するための思考力や判断力＝「自分で考える力」が必要になってきます。したがってより細やかな指導をするために、習熟度別のクラス編成にしています。中3・高1とも3つのグレードに分けて授業を行います。そのコースにあった進度で、時間をかけて着実に「基本」と「自分で考える力」を身に付けてもらいます。また自宅学習も「基礎」の段階から「基本」の段階へと移行してもらいます。『入門期』では「こんなことをしなさい」と言われていましたが、内容が難しくなりますから、自宅学習も自分で考えて工夫する必要がでてくるので

す。

最後の高校2・3年の『完成期』では、各自の志望校の合格を目指した授業を展開していきます。大学の入試問題は、今まで学習してきた「基本」をいくつか用いることによって解くことができます。しかし何を用いればよいのかを判断する力、そしてそれを相手に伝える力が必要になります。『発展期』で意識し始めていた「思考力・判断力」そして「表現力」ですね。この3つの力がどのくらい鍛えられたかによって、大学の合格は決まります。やさしい入試問題からはじめて、上記の3つの力を徐々に鍛えてもらい、各自の目指す頂上に向かって着実に登攀してもらいます。また数学科でも他の教科同様、教員が責任を持って入試問題の研究を行っています。より高い頂上を目指すためにも、気軽に相談をしてみてください。

オリジナル・プリント

新教育課程では、多くの内容が削減されました。特に高校、理系に進みたいと考えている生徒にとって、教科書の内容だけでは物足りません。そのため、本校ではオリジナル・プリント教材を作成し、ハイレベルな内容にも対応していきます。

補習の充実

本校では全学年対象の補習を夏休みの1・2週目に設けています。中学1・2年次には5日間の補習、中学3年次には高校I年と共に受けられる補習と3泊4日の勉強合宿、高校の全学年にはそれぞれ2週間の補習ならびに受験補習が組まれています。さらに、高校III年時にはこの2週間以外の受験補習も組み込まれ、数学が苦手な生徒から理系難関大学を目指す生徒まで、自分の目的に応じて補習ならびに受験補習を受けることができます。特に高校III年の補習では、志望校別やセンター対応の講座などを設け、よりきめ細かな指導をしていきます。